The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（七）
Author(s)	池田, 光子; 黒田, 秀教
Citation	中国研究集刊. 2005, 38, p. 205-217
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『戦国楚簡研究２００５』（『中国研究集刊』別冊特集号（総38号））　平成十七年十二月　二〇五頁―二一七頁

新出土資料関係文献提要（七）

池田光子
黒田秀教

本提要は、『中国研究集刊』第三十七号に掲載された「新出土資料関係文献提要（六）」の続編である。前回同様、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）に関する文献を主対象とした。

〈和書〉

『諸子百家〈再発見〉　掘り起こされる古代中国思想』（浅野裕一・湯浅邦弘編、岩波書店、二〇〇四年八月、二四四頁、縦組和文）

新出土資料による研究を一般向けに解説した概説書。湯浅邦弘氏の「はじめに」、本篇全七章、及び附録、浅野裕一氏の「あとがき」より成る。本篇は、第一章「諸子百家と新出土資料」（浅野裕一）、第二章「諸子百家の時代の文字と書物」（福田哲之）、第三章「天と人との距離」（菅本大二）、第四章「人間の本性は善か悪か」（竹田健二）、第五章「孔子の教えは政治の役に立つか」（湯浅邦弘）、第六章「老子と道家」（湯浅邦弘）、第七章「孔子は『易』を学んだか」（浅野裕一）である。また附録は「郭店楚簡形制一覧」、「上博楚簡形制一覧」、「戦国楚簡書誌用語解説」、「新出土資料関係文献案内」によって構成されている。

第一章では、諸子百家について概説しながら、新出土資料によって従来の学説が受けた見直しについて述べる。第二章では、出土資料発見の歴史を振り返りながら、諸子百家の時代の文字や書物の形態について説く。第三章からは、それぞれが中国思想の重要な問題をテーマにし

ており、第三章では天と人について、第四章では性説について、第五章では儒家の政治思想について、第六章では老子と道家について、第七章では『易』について、それぞれ論じる。

本書は戦国楚簡研究会のメンバーが一般向けに新出土資料の概要と意義を解説したものである。新出土資料の研究によって戦国思想史研究は通説の見直しを迫られているが、一般には依然として馴染みの少ないものである。そのような中で、新出土資料の発見によって戦国思想史学が迎えている大きなうねりを、一般読者に向けて発信したことに大きな意義があろう。

（黒田秀教）

『竹簡が語る古代中国思想―上博楚簡研究―』（汲古選書42、浅野裕一編、汲古書院、二〇〇五年四月、全二七九頁、縦組和文）

上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）を対象とした、初の邦文による研究書である。浅野裕一氏を代表とした「戦国楚簡研究会」の会員が執筆者であり、本文は全十章から成っている。各章は以下の通り。

第一章「『容成氏』における禅譲と放伐」（浅野裕一）、第二章「『容成氏』における身体障害者」（竹田健二）、第三章「『従政』の竹簡連接と分節」（湯浅邦弘）、第四章「『従政』と儒家の「従政」」（湯浅邦弘）、第五章「『子羔』の内容と構成」（福田哲之）、第六章「『中弓』における説話の変容」（福田哲之）、第七章「『魯邦大旱』における「名」」（浅野裕一）、第八章「『魯邦大旱』における刑徳論」（浅野裕一）、第九章「『恒先』の道家的特色」（浅野裕一）、第十章「『恒先』における気の思想」（竹田健二）。第一章から八章までは儒家系文献、残り二章は道家系文献と大きく分けられる。

第一章は『容成氏』に見える王朝交替の歴史、禅譲と放伐に対する評価を採ることにより、作者の思想的立場を明らかにしようとしたもの、第二章は同じく『容成氏』について、身体障害者に対する施策の充実が、理想的政治が行われていたか否かを計る指標とされていたことの意味を探るものである。第三章は政治に従事する者の心構えを説く『従政』テキストを再考して、最も妥当と思われる再配列を提示し、それを承けて、第四章では『従政』の儒家思想における意味について論究している。第五章は『子羔』の内容と構成の再検討を行い、他の諸篇

と同一の冊書である可能性を指摘したもの、第六章は『中弓』における孔子と仲弓の問答を『論語』子路篇と比較し、『論語』から『中弓』へと内容が変化していくことの意味を検討したものである。第七章は『魯邦大旱』に見える「名」について考察し、それが神事を表す「明」字の意味で用いられているのではないかという結論を提示し、第八章では『魯邦大旱』に見られる刑徳論の内容を考察している。

第九章は『恒先』と『老子』『太一生水』とを比較しつつ、『恒先』の道家思想としての特色を考察し、第十章では『恒先』の宇宙生成論に見える気の思想に焦点を当て、その思想史上の意味を探っている。

いずれの章も、他の学術雑誌に既出の論文を再編したものであり、初出については、巻末に「初出誌一覧」としてまとめられている。

また、本文の最後に「附録」として、「上博楚簡形制一覧表」がある。馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書(一)』～『(三)』に掲載されている資料の竹簡形状を一覧にしたものである。備考欄も付けられ、他篇と同筆であればその旨が記載されている。竹簡の概要をイメージするのに便利である。

本著は、上博楚簡についての最新の研究成果をまとめたもので、日本の出土資料研究の現状を広く紹介するとともに、今後の出土資料研究の展望を切り拓く画期的な書であると言える。

(池田光子)

〈中文書〉

『郭店楚簡綜覧』(出土文献訳注研析叢書P020、劉祖信・龍永芳編著、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇五年三月、一二一頁、横組繁体字)

郭店一号楚墓及び郭店楚簡についての概説書。付録として『太一生水』・『老子』甲乙丙のモノクロ図版を載せる。また、巻頭に、郭店一号楚墓の発掘状況、泥を洗い流した後の束状の竹簡、出土品(耳杯や毛筆等)のカラー図版九点も収録されている。

全六章で構成されており、内容は大きく四分類できる。墓の形状やその周囲の状況、発掘状況を記した章と、楚文字に関する章、道家文献の章と儒家文献に関する章、そしてまとめとして道家文献と儒家文献とが一つの墓に埋葬されていたと言う視点から楚文化を考察した章、の

四つである。

中心となるのは、第四章・五章に該当する、道家文献と儒家文献の箇所である。

道家文献では、郭店楚簡『老子』甲乙丙と『太一生水』とを挙げる。まずは『老子』甲乙丙を順に挙げ、竹簡の形状や今本『老子』章次との差異などに触れた上で、郭店楚簡『老子』の思想的特徴、例えば、乙本は修身・養徳・治国についての篇である等、について指摘している。『太一生水』も『老子』と同様に、釈文を掲載してから、竹簡の形状に触れ、次いで思想的特徴（宇宙生成論について述べた書である点）について指摘している。

儒家文献は、『緇衣』『魯穆公問子思』『窮達以時』『五行』『唐虞之道』『忠信之道』『成之聞之』『尊徳義』『性自命出』『六徳』『語叢』一～四の釈文を挙げる。道家文献と同様、篇ごとに竹簡の形状を記す。その後に続いて、伝世文献と比較できるものについては、その点について指摘し、特に該当する伝世文献が無い場合は竹簡に記されている登場人物について説明を施した上で、篇ごとの思想的特徴、例えば『窮達以時』であれば、天人関係について述べている篇である、等を指摘している。

「前言」に述べられている通り、本書は平易な概説書として書かれたものである。そのため、研究論著の出典については逐一詳述していない（主な参考文献については、「参考文献」としてまとめて第六章の後に記載）。また、本文で用いている楚簡の釈文等については、『郭店楚墓竹簡』（荊門市博物館、中国文物出版社、一九九八年五月）に依っており、独自の釈読が述べられている訳ではない。研究書と言うよりは、「郭店楚墓竹簡」の背景（出土場所や出土状況等）や、発見された書籍群の特徴、そこから、楚という土地の文化についてまでを知ることができる概説書としての色合いが強い書である。しかし、これまでほとんど伝えられることのなかった盗掘の状況や、その後の緊急発掘調査の様子が詳述されているなど、重要な情報を提供している。

（池田光子）

『簡帛古書与学術源流』（李零著、新知三聯書店、二〇〇四年四月、四四五頁、横組簡体字）

出土資料学の講義書。前言、本篇として上篇「概説」、下篇「導読」の二篇、結語、そして後記、索引より成る。本篇の内訳は、上篇は第一講から第六講、下篇は第七講

から第十二講の全十二講。

上篇は出土資料を研究するにあたって必要となる基本知識の講義となっている。その講題は、第一講「引言：尋找回来的世界」、第二講「三種不同含義的〝書〟」、第三講「簡帛的埋蔵与発現」、第四講「簡帛形制与使用」、第五講「簡帛古書的整理与研究」、第六講「簡帛古書的体例与分類」である。

続く下篇は経・史・諸子・詩賦・兵書・方術の系統に分けた講義となっている。その講題は、第七講「簡帛古書導読一：六芸類」、第八講「簡帛古書導読二：史書類」、第九講「簡帛古書導読三：諸子類」、第十講「簡帛古書導読四：詩賦類」、第十一講「簡帛古書導読五：兵書類」、第十二講「簡帛古書導読六：方術類」である。

本書は前言で自ら「教材」と言っているように、研究書ではない。そのため各講には附録として、王国維『簡牘検署考』や余嘉錫『古書通例（摘録）』といった出土資料学における基本的な論文や、先秦両漢の現存古書一覧や簡帛資料の出土地域の分類、其の他基本的概説などが載せられている。また出土資料を研究するに際しての参考書も掲示している。

著者は出土資料研究において、学界の牽引者とも呼べる人物である。その手に成る出土資料学の初級者への講義書は、これから出土資料を学ぼうとする者にとって、極めて有意義なものであろう。

（黒田秀教）

『郭店楚簡《老子》研究』（中華文史新刊、聶中慶著、中華書局、二〇〇四年二月、三六九頁、横組繁体字）

郭店楚簡『老子』の研究書。本書は著者の博士論文である。

全六章から構成されており、他に付録一～四と郭店楚簡『老子』のモノクロ図版とが、本論の後に記載されている。章立ては以下の通り。

第一章「郭店楚簡《老子》与老子其人其書」、第二章「関於郭店楚簡《老子》的文本構成」、第三章「《老子》簡本、帛書本、通行本比較研究」、第四章「簡本《老子》異体字、古今字、通仮字、同源字考釈」、第五章「郭店楚簡《老子》研究評述」、第六章「郭店楚簡《老子》校釈」。

甲乙丙の各篇で使用されている文字の異同について着目し、郭店楚簡『老子』甲乙丙の構成と校釈、その成立時期について論究している。

郭店楚簡『老子』甲乙丙の構成〔以上、第二章〕と郭店楚簡『老子』と今本『老子』及び馬王堆帛書『老子』甲乙との比較〔以上、第三章〕・郭店楚墓の年代と墓主の身分・郭店楚簡が作製された頃の儒家と道家との関係・郭店楚簡『老子』の中にある「有」「無」の関係〔以上、第五章〕、等の郭店楚簡及び郭店楚簡『老子』にまつわる既存の研究についても触れており、関連論文の紹介及び批評もまとめてある。

以上の先行研究を承けた上で、独自の郭店楚簡『老子』校釈を甲乙丙に分けて記載している。この校釈では、楚簡『老子』と併せて馬王堆帛書『老子』・王弼本も挙げている。

郭店楚簡『老子』の構成問題については、甲乙丙それぞれの篇の中で用いられている文字の異同（例えば、「亡」と「無」。「亡」は甲乙では用いられ、「無」は丙で用いられている。「無」は「亡」の字の代用として、後代に多く用いられるようになったため、丙は甲乙よりも成立が後とする）に注目することで、各篇の成立時期が異なるという見解を提出している。結果として、今本『老子』のような完成体に至る道程で生まれたものが、郭店楚簡『老子』甲乙丙であろう、とする。

郭店楚簡『老子』で用いられている文字に注目して論を進めていることもあり、本論の第四章箇所では、郭店楚簡『老子』の異体字・古今字・通仮字・同源字について考察を加えている。「附録四」も文字についてのものであり、隷定された文字を総画で調べることができる。

なお、本書は二〇〇四年の刊行であるが、「後記」や参考文献に記載されている著作年から判断して、二〇〇一年までの『老子』研究を対象としているものと思われる。『老子』研究者にとっては、著者の批評がついた論文紹介となっているため、この時点までの郭店楚簡『老子』研究の概要を知るのに簡便な書である。また、隷定段階で、どの様な文字が郭店楚簡で用いられているか、『老子』ではどの様な釈読をされているかを容易に検索できるため、文字研究の面でも有用な書と言えよう。

（池田光子）

『《周易》経伝梳理与郭店楚簡思想新釈』（金春峰著、中国言実出版社、二〇〇四年十一月、一九二頁、横組簡体字）

『周易』と郭店楚簡に関する研究書。本書は『中国研

究集刊』第三十四号に掲載された「新出土資料関係文献提要（二）」において紹介されている同タイトル、同著者の書を、繁体字から簡体字に組み直し、出版社・装丁を改めて出したものである。よって内容は全く同一であるが、便をはかり各編題を紹介する。

自序及び本編全十三章より成る。各章題は、一「《周易》之編纂成書及其思想哲学意義」、二「恐惧修省与観象進徳」、三「《彖伝》与《小象》的思想特点及成書之時代」、四「帛書《繫辞》反映的時代与文化」、五「通行本《繫辞》之成書」、六「《繫辞》的哲学思想」、七「《繫辞》的倫理道徳思想」、八「《周易》卦序和《序卦》的成書時代与思想特色」、九「帛書《二三子問》、《要》与孔子」、十「帛書《繆和》、《昭力》反映的思想与時代」、十一「郭店楚簡《六徳》、《忠信之道》、《成之聞之》之思想特征与成書時代」、十二「郭店楚簡《老子》的文史哲意義」、十三「読郭店楚簡《性自命出》札記」である。

（黒田秀教）

『簡帛文献与古代法文化』（崔永東著、新出簡帛研究叢書 第一輯、湖北教育出版社、二〇〇三年一月、三一一頁、横組簡体字）

出土資料を手がかりとした中国古代法文化の研究書。「新出簡帛研究叢書」シリーズの第一巻で、巻頭に李学勤氏の総序がある。以下、導論、本篇全四章、結語、そして後記より成る。各章題は、第一章「竹簡中的法律思想与法律制度」、第二章「帛書中的法律思想与法律制度」、第三章「従竹簡看儒法両家法律思想的法律化」、第四章「帛書中的法律自然主義理論与中国古代法制」である。

結語における著者の主な結論は、以下の通りである。

（一）殷代は重刑酷法であったが、周代になって明徳慎罰になり、漢代に到ると寛刑主義になった。明徳慎罰の思想は中国古代の法律精神であり、儒、道、法の諸家はこの思想を己れの法律思想体系に組み入れた。

（二）道徳の法律化と法律の自然化は中国伝統の法律文化の基本特性である。道徳の法律化では、西周時代には「礼」として表現され、「礼」が広義の法律であった。春秋戦国時代に法律が「礼」から独立し、法家の「不務徳而務法」論が立法実践において有力となった。漢代に到ると儒家の道徳の法律化が立法の追究目標となった。法律の自然化では、立法の根拠を「天」或いは「天道」に据える思想の起源は春秋時代で、戦国中期になると理

論的にも完備されていく。

（三）儒家と法家との両思想は、秦律において法家が主となってはいるものの、儒家も一席を得て両存している。これは秦の統治者が実用主義の立場から有益である学説を受け入れたからである。戦国後期から現われる儒家と法家との合流は、漢代に至り董仲舒によって大成される。

（四）中国古代の犯罪学説は非常に発達していて、犯罪原因を人間性、経済、政治、道徳など多角的な方面から捉えている。これによって犯罪を予防するために、単に酷刑に頼らず、道徳教育、経済、政治など多様な手段を用いるのである。

本書は書名にも掲げるように、「簡帛文献」を手がかりとして、古代中国の法を論じる。そのために扱う出土資料も、郭店楚簡、上博楚簡、睡虎地秦簡、銀雀山漢簡、馬王堆帛書など、時代は戦国秦漢を跨ぐ。法家思想を研究するには、見逃せない研究書であろう。

（黒田秀教）

『中国出土古文献十講』（裘錫圭著、名家専題精講第四輯、復旦大学出版社、二〇〇四年十二月、四二三頁、横組簡体字）

出土資料の研究書。序言と全十講よりなる。各講題は、1「中国古典学重建中応該注意的問題」、2「新出土先秦文献与古史伝説」、3「中国出土簡帛古籍在文献学上的重要意義」、4「出土古文献与其他出土文字資料在古籍校読方面的重要作用」、5「関于郭店簡中的道家著作」、6「郭店簡儒家著作校読挙例」、7「関于上博簡的一些問題」、8「関于馬王堆帛書《老子》卷前後古佚書」、9「関于馬王堆帛書《戦国縦横家書》」、10「漢簡中的俗文学資料」である。

本書は著者の出土簡帛に関する論考を輯めたもので、初出は各論考の最後に附記されている。収録している論考は、郭店楚簡、上博楚簡から馬王堆帛書や他漢簡に及ぶ。楚簡に関する5～6講に収録している論考は、以下の通りである。第5講「郭店《老子》簡初探」、「糾正我在郭店《老子》簡釈読中的一个錯誤――関于"絶偽棄詐"」、「《太一生水》"名字"章解釈――兼論《太一生水》的分章問題」。第6講「由郭店簡《性自命出》的"室性者故也"説到《孟子》的"天下之言性也"章」、「読《郭店楚墓竹簡》札記三則」、「釈郭店《緇衣》"出言有一"、黎

明所訂”――兼説”一”為”針”之初文」。第7講「関于《孔子詩論》」、「談談上博簡和郭店簡中錯別字」、「談談上博簡《子恙》簡的簡序」。

著者は文物出版社『郭店楚墓竹簡』に注釈を施した人物で、近年の楚地方から出土した思想系文献の研究に、最初期から関わっている。本書は、著者のこれまでの諸論考をまとめて見るのに便利であろう。

（黒田秀教）

『楚地簡帛思想研究 二』（丁四新主編、湖北教育出版社、二〇〇五年四月、四三七頁、横組簡体字）

出土資料の論文集。タイトルは若干異るが、主編者、出版社を同じくし、装丁も類似することから、本提要（二）で紹介した『楚地出土簡帛文献思想研究 一』の続編と思われる。六分類された本編と後記から成る。各分類の見出しは、「上博楚簡」、「上博楚簡《恒先》専題」、「郭店楚簡」、「楚系数術類、卜筮祭祷類出土文献」、「馬王堆帛書」、「張家山漢簡《二年律令》専題」である。

収録されている郭店楚簡、上博楚簡関係の論考題目は以下の通りである。「上博楚簡」には「上博簡《従政》、《周易》校読」（陳偉）、「上博簡《容成氏》政治哲学思想深析」（呉根友）、「《容成氏》”尚賢”思想弁析」（孫衛）、「楚簡《昔者君老》新注」（曹峰）。「上博楚簡《恒先》専題」には「《恒先》――道法家形名思想的佚篇」（郭斉勇）、「上博楚簡《恒先》篇哲学思想深析」（呉根友）、「楚簡《恒先》三題」（劉貽群）、「楚簡《恒先》章句釈義」（丁四新）。「郭店楚簡」には「論郭店楚簡”情”的内涵」（丁四新）、「《性自命出》的性情思想研究」（欧陽楨）、「郭店簡《緇衣》与《礼記・緇衣》的思想異同」（欧陽楨）、「楚簡所見儒家仁与愛関係的研究」（李曄琳）。

この内、上博楚簡『恒先』はとりわけ注目を浴びている文献であり、本書でも特に専題を設けている。『恒先』の研究には有用な書であろう。

（黒田秀教）

『古文字論集』（張桂光著、中華書局、二〇〇四年一〇月、二八二頁、横組繁体字）

中国古文字の研究書。曽憲通氏による序、二十五本の

論考及び引書簡称表より成る。特に章立はしていないが、目次で三グループに分類している。第一グループは古文字学の総論五本、第二グループは甲骨文、金文、郭店楚簡、上博楚簡に関する文字についての論考十一本、第三グループは文字学からアプローチした思想に関する論考九本を収録する。

楚簡関係の論考のタイトルは、以下の通りである。「楚簡文字考釈二則」、「《郭店楚墓竹簡・老子》釈注商榷」、「《郭店楚墓竹簡》釈注続商榷」、「《戦国楚竹書・孔子詩論》文字考釈」、「《上博簡（二）》《子羔》篇釈読札記」、「楚竹書《周易》卦序略議」。

本書は著者の出土簡帛文字に関する論考を輯めたもので、初出は各論考の最後に附記されている。

文字学の立場から出土資料を研究した本書は、出土資料を古文字学という視点から考察する際に有益であろう。

（黒田秀教）

『古文字研究』（中華書局出版、簡体字）

中国の古文字に関する研究論文を中心とした学術雑誌。編者や文字組は輯によって異なる。編者が安徽大学に移行した第二十二輯より、新出土資料に関する論考が多く発表されている。新出土資料の発見は、思想史研究の面だけではなく、文字学研究にも大きな影響を与えていることが分かる。

新出土資料を他の出土文献や金文に見られる字形と比較対照し、隷定後の音通や伝世文献との比較から文字認定を行っている論文や、篇次や思想面について考察を加えている論文なども掲載している。

彭裕商「読《郭店楚墓竹簡》札記」（第二十四輯所収）のように、札記類も少なからず掲載されているが、掲載論文の主な研究方法としては、陳偉武「旧釈"折"及従"折"之字平議—兼論"慎徳"和"悊終"問題」（第二十二輯）のように、一文字または一語句に注目して、文字の変遷を追うものが目立つ。

また、裘錫圭「《太一生水》"名字"章解釈—兼論《太一生水》的分章問題」（第二十二輯）・季旭昇「《孔子詩論》分章編聯補缺」（第二十五輯）のように篇次の問題、陳偉「《太一生水》校釈読并論与《老子》関係」（第二十二輯）のように思想的な研究にまで踏み込んだ論文も掲載されている。そのため、新出土資料に関する思想史研究をする際にも、目を通しておく必要がある雑誌と言えよう。

なお、第一輯から二十二輯までの内容については、第二十三輯の巻末にある「索引」で知ることが可能である。時代と著者名の二方面から検索することができ、便利である。

（池田光子）

〈シンポジウム〉

『国際シンポジウム戦国楚簡と中国思想史研究会議論文集』（於大阪大学、二〇〇四年三月二十六～二十七日開催時配布冊子、一二六頁、横組繁体字）

大阪大学中国哲学研究室、戦国楚簡研究会、及び台湾の簡帛道家資料暨新出土文献研読会とが共催して、二〇〇四年三月二十六～二十七日に行った国際シンポジウムの際、配布された冊子。両日のプログラムと研究発表の内容とを、まとめたものである。

記載順は、当日の発表順で、以下の通り。

陳鼓応「郭店楚簡所呈現的重要哲学問題―関於儒道竹簡「改寫古代哲学史」的另類観点」、郭梨華「儒家簡帛佚籍中「徳」与「色」的弁析」、林素英「上博簡〈民之父母〉思想探微―兼論其与〈孔子閒居〉的関係」、林啓屏「論〈民之父母〉之「五至三無」」、顧史考（Scott Cook）「楚簡的釈読与古今校讐者的抉擇」、潘玉愛「初探〈性自命出〉的心性観」、林明照「論〈性自命出〉中「心」与成徳的関係」、洪嘉琳「論郭店楚簡《老子》之無為説」。

なお、詳細なプログラムや二日目に行われたパネルディスカッションの内容については、本誌第三十六号（特集号「戦国楚簡と中国思想史研究」）に掲載されている。また、このシンポジウムで発表された論文の一部が、加筆訂正を加えられ、前述の第三十六号に発表されている。第三十六号に発表された各氏は以下の通り。陳鼓応氏、郭梨華氏、林素英氏、林啓屏氏。

（池田光子）

『「新出土文献与先秦思想重構」国際学術研討会会議論文』（於台湾大学、二〇〇五年三月二十五～二十六日開催時配布冊子、全三八〇頁、横組繁体字）

二〇〇五年三月二十五～二十六日、台湾大学において

開催された国際シンポジウムの折に配布された冊子。口頭発表用の論文集である。また、当日のプログラム等も冒頭に記載されている。

この会合は、出土資料研究の第一線で活躍するベテランの研究者によるシンポジウムであり、その発表内容は、出土文献を研究していく上で、大変参考となるものである。今後書籍や雑誌掲載論文の形として発表されるものを多く含んでいるであろう。ここではその発表題目を列挙することとする。

李学勤「孔孟間与老荘之間」、林義正「孔子的天人感応観：以〈魯邦大旱〉為中心的考察」、林素英「従郭店儒簡検視文王之人君典型」、趙中偉「《周易》卦序詮釈意涵的転化与発展—以今本《周易》・《帛書周易》及《戦国楚竹書周易》為例」、季旭昇「従「求而不患」談《上博三・恒先》後半部的釈読」、夏含夷「試論西周銅器銘文的寫作過程：以眉県単氏家族銅器為例」、馮時「西周金文所見「信」・「義」思想考」、浅野裕一「上博楚簡《相邦之道》的整体結構」、廖名春「楚竹書《曹沫之陳》与《慎子》佚文」、趙生群「関於出土文献与伝世文献関係的幾点看法」、丁原植「《恒先》与古典哲学的始源問題」、金安平「Understanding *yangong* (言公) in Two Ways:Lessons from the *Yunzi* and Guodian Bamboo Texts理解「言公」的両種方式：《荀子》与郭店楚簡的啓示」、顧史考（Scott Cook）「郭店楚簡〈成之〉等篇雑志」、郭梨華「曾子与郭店儒簡的身体哲学探究」、池田知久「睡虎地秦簡《語書》与墨家思想」、戴卡琳（Carine Defoort）「The growing scope of "*jiān*" 兼: differences between chapters 14, 15 and 16 of the *Moji*」、葉海煙「荘子内篇「道」・「天地」与「自然」三概念的綜攝意義」、陳麗桂「〈太一生水〉研究綜述及其相関簡序問題」、楊儒賓「黄帝与尭舜—先秦両種天子的原型」、林慶彰「孔子詩論与詩序的比較」、蔣秋華「孟津之会重探」、鍾宗憲「「黄帝」形象与「黄帝学説」的窺測—兼以反省《黄帝四経》的若干問題」。

これらの題目から、出土文献、特に郭店楚簡・上博楚簡を研究対象の中心とするシンポジウムであったことが分かる。また、上博楚簡の中でも比較的最近公開された『周易』『曹沫之陳』『相邦之道』などについて、早くも研究発表が行われたことも分かり、このシンポジウムの先進性を看取することができる。

（池田光子）

『先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会

会議論文』（於台湾大学、二〇〇五年三月二十七～二十八日開催時配布冊子、二一二頁、横組繁体字）

二〇〇五年三月二十七～二十八日に台湾大学で開催されたシンポジウムの際、参加者に配布された冊子。このシンポジウムは、台湾と日本の若手研究者が発表の中心となり行われたもので、この冊子に掲載されているのは、プログラムと口頭発表を論文形式にまとめたものとである。掲載は発表順となっている。

研究発表は、出土資料に限らず、広く先秦文献を対象とするものであるが、ここではその内、新出土資料を対象とした論文のみを紹介する。

上野洋子「上博簡《詩論》中「民性固然」之蠡測」、潘玉愛「従《六徳》看儒家的人倫意蘊」、朱湘鈺「《礼記》論「楽」新探」、魯楽漢（John Delury）「顧炎武如何解読性自命出」。

本提要執筆時点では、管見の限り、このシンポジウムの成果が、他の書籍や雑誌等に発表された例はない。しかし、今後この発表を基にして、学術誌等に研究成果が公開される可能性は高いと思われる。新出土資料について、若手の研究者がどのような方向から研究を進めているのかを知ることができる一冊である。

なお、このシンポジウムに関しては、参加者の所感や対談の様子などが本誌第三十九号に掲載されている。

（池田光子）